

熊本県立大学津曲研究室十周年記念誌の総括

熊本県立大学津曲研究室十周年記念誌編纂委員長(11)藤本直也

1. はじめに

私は幼いころから日本史が大好きでした。小学生の頃は、毎日のように自宅や学校近くの史跡を探検していましたし、熊本城の天守閣には何度も登りました。通っていた小学校の図書館にあった歴史マンガや日本人の伝記はほぼ読み尽したと思います。無論、歴史の授業も大好きで、教科書や資料集は飽きることなく眺めていました。

そんな歴史好きの私ですが、自ら歴史を紡ぐことになるとは夢にも思っていませんでした。しかし、今回、津曲研究室の過去10年の歴史をまとめる作業の取りまとめ役をさせていただくこととなり、約1年半に亘ってその編纂に取り組みました。そして、平成27年2月27日に無事に熊本県立大学津曲研究室十周年記念誌（以下「本誌」とする）を発行することができました。無事に完成できたのは、言うまでもなく津曲先生を始め、津曲研究室の皆様のご協力のおかげです。改めて厚く御礼申し上げます。津曲研究室の10年間の歩みは本誌をご覧いただければ概ねご理解いただけると思います。同窓の方々と共にご覧になれば、過ぎし日の楽しい思い出が更に蘇ってくるのではないのでしょうか。

さて、本誌の発行により津曲研究室の歴史はその体系をなしましたが、私は同時にこの1年半に亘る編纂事業そのものの過程も残すべきではないかと考えました。本誌のあとがきにも書きましたが、歴史を紡ぐことは、それを学ぶこと以上に大変であると痛感しました。そして、その作業に挑んだ、編纂委員の奮闘記を残すことで本誌も完成するのではないかと思ったのです。本誌の編纂がどのような経緯から始まり、そしてどういった過程を辿りながらまとめあげられたのかを、編纂者という極めて主観的な立場からではありますが、ここに記しておきたいと思います。

2. 津曲先生からの提案

本誌の制作は津曲先生によって提案されました。提案がなされた2013年7月14日(日)のガリラボ通信には次のように書かれています。「このガリラボ通信は(省略)ここガリラボで学んできた卒業生にとっては、自分たちの学生時代を振り返るときの貴重な資料になってくれるのではないかと思います。(省略)ガリラボ通信の情報を使って、自分たちの学生時代の活動=存在の証をまとめることもできるかもしれません。」私たちが日ごろ気にすることは私たちの人生も立派な歴史ですし、単に思い出を振り返るだけでなく、それを“存在の証”としてまとめることは大変興味深いことだと思い、私は編纂に携わることにしました。

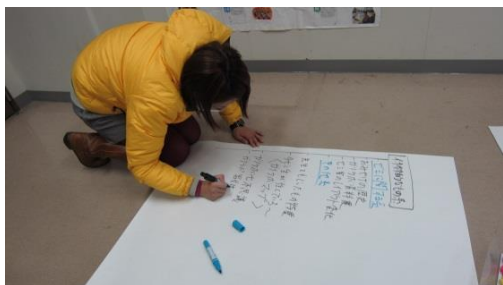
3. 11 ゼミ生による編纂の開始

私も編纂委員に名乗り出たものの、どのように歴史を紡げばよいか分からず、これまでのガリラボ通信を全て見返し、その中でもトピックとなるものを抜き出していけば、何とか形にはなるのではという軽い気持ちでいました。それこそ、「10年史（当時はそう呼んでいました）の制作＝ガリラボ通信を要約すること」と思い込んでいたのです。1年間の通信の更新回数は500程ですから、通信が開設された2009年の9月から約5年間分、数にして約2500エントリーを読めば10年史は完成すると考えていました。国家の歴史を調べるわけではないし、そう難しいことではない。むしろ過去のガリラボ通信を読むいい機会である。そのくらいにしか考えていなかったのです。編纂委員に手を挙げたのも私だけでしたが、それでも十分事足りると感じていました。

しかし、私は大きな勘違いをしていたのです。ガリラボ通信だけでは、それが開設される以前の約5年間の出来事を調べることが出来ないのです。さらに、今でこそ大量の写真データがきちんと整理して残されていますが、ガリラボがスタートした当初はその様な文化はありません。また写真データの数が少ない上に、わずかな写真データもバラバラに保存されています。このことに気づいたとき、気が遠くなる思いがしました。それでも私は意外と楽観的でした。というのも完成した10年史の青写真は描けていたからです。しかしながら、地道で精緻な作業が要求されるということは強く意識し始めていました。

青写真は描けていたとは言うものの、どこから手を付けていいのかわからずそのまま4か月が過ぎました。そして、2013年の白亜祭も興津会も終わり、私が所属していた11ゼミの取り組む課題も一段落した11月下旬、11ゼミ生のゼミ会議にて、11ゼミ生の制作スキルの向上を目指して、10年史の制作に取り組むことが決まりました。

11ゼミ生がまず取り組んだことは、これまでのゼミ活動を全て洗い出すという作業でした。そしてそれらを種類や年代ごとに分類し、そのゼミ活動や委員会活動についての文章を書くために必要な情報は、卒業生への聞き取り調査で収集することになりました。各項目の質問に答えて頂ける卒業生を調べ、卒業生に対してメールによる質問調査を開始したのは2014年3月2日のことでした。過去のゼミ活動を洗い出し、質問項目と回答して頂く卒業生を決め、メールもお送りした私たち11ゼミ生は、この10年史プロジェクトは順調に進み出したと思っていました。けれども、その1か月後に私たちの計画には重大な欠陥があることに気づかされます。



11 ゼミ生による過去のゼミ活動の洗い出し作業の様子

4. 調査方法の検討

3月上旬に先輩方へお送りしたメールは1か月後を返信期限にしていました。多くの卒業生の方にお送りしていたため、その整理が大変な作業になると想定した私は覚悟して3月の下旬を迎えていました。しかし、いざ蓋を開けてみると返信のあったメールは、予想をはるかに下回る数でした。

卒業生からの返信が少なかった主な原因は、卒業して時間が経っていることで、質問に答えられるほどの記憶が残っていないことであることが、数名の卒業生の方とお話しするうちに分かってきました。原因を知って私も、自身の高校時代を思い返しましたが、やはり500字、1000字といった文章を書けるほどの詳細な記憶が残っていないことに気づきました。したがって、10年史の制作においては、まずゼミ室に残っている当時の制作物や写真データ、ゼミ新聞、卒業文集、まとめ雑誌といった資料をくまなく見ていくことで当時の活動を把握することが必要になりました。卒業生の方々に質問に答えて頂いて、それをまとめるという、編纂委員にとって楽な方法は通用しないようでした。もちろん、ゼミ新聞などを調べても分からない部分はあるので、その場合はピンポイントで卒業生に質問していくことになりました。この順序で進めれば、10年史のメインともいえる10年間のゼミ活動や委員会活動、イベント活動についてまとめた文章の執筆はできると判断しました。

さて、その次に問題となったのは年表の作成でした。歴史をまとめる際の基礎となるのは、年表であると私は考えていました。日本史を学んだり、調べたりする際も皆さんは年表を軸にしているのではないのでしょうか。年表を広げて見ることはしなくても、皆さんの頭の中には日本の歴史の年表があって、その内のどの部分を調べようとしているのかを何となく把握しながら調べていると思います。本誌の編纂においても、編纂委員が文章などを書く際、ガリラボがいつから始まり、今どこまで進んでいるのか、自分たちが在籍しているのはいつごろなのか、今自分はどの部分のゼミ活動について調査しているのかを把握することが重要であると考えました。その為にも、ゼミ活動などの文章を書く前になんとでも年表を完成させる必要がありました。その年表も卒業生の方に書いて頂くのが一番だろうと考え、卒業生の方々にゼミ室まで足を運んでもらい、書いて頂くことにしました。けれどここでも同様の問題が発生したのです。

卒業生の方々にご自分が在籍した当時の出来事を記入してもらおうと、参考資料となるガリラボ通信の開設前と後ではその内容の濃さに大きな差があったのです。そのため、どれほど詳しく作成するのかの基準が難しくなってきました。大学の研究室は毎年似通った活動を行っているため、年によって質に差があることは適切ではないと思ったからです。また、当初私はゼミでの出来事、すなわちスクープとなるような事柄のみを年表に書いてく予定でしたが、そこには2つの問題点がありました。1つはフィールドワークやイベント事の少なかった2000年代初頭は書くことが無くなってしまうということです。もう1つの問題は、スクープのみを記述すると、各代の様子を掴めなくなってしまうということです。例えば2007年のスクープのみを記述した年表を作成すると、当時の05ゼミ生が日常的に

はどの様な活動に取り組み、どのような学びがあったのかを知ることが出来ません。私は年表についても、再度先輩方の制作物、ゼミ新聞などを全て見返す作業を行うことに決めました。

この様に様々な問題が表面化してきたところで、2013年度も年度末になり、同時に卒業研究に取り組み始めた11ゼミ生による編纂体制が終わることになりました。

5. 新体制 津曲研究室十周年記念誌編纂委員会発足

11ゼミ生の卒業研究が始まったことで新しい体制での編纂が必要となってきました。また、学校から予算が下りている本誌の制作費には使用期限が決まっており、2015年の2月末までに完成しなければなりません。前年度の活動から予想以上に地道なそして精緻な調査活動が必要となることが分かっていたため、私はその様な編纂作業が出来る精鋭部隊を結成しない限り、予算の使用期限までに完成できないと感じていました。そこで、ガリラボの事情に詳しく、地道な調査や編纂に取り組めるメンバーを、11ゼミ、12ゼミのゼミ新聞部や研究チームなどから集めました。そして、2014年の5月2日に、11ゼミ生3名、12ゼミ生4名の合計7名からなる編纂委員会を立ち上げました。また、それまで10年史と呼んでいましたが、より正式なものであることを示すために「熊本県立大学津曲研究室十周年記念誌」と名称を変更しました。

卒業生の方々に年表を記入してもらう作業が終わるのを待って、本格的な編纂を始めるために、2か月間の準備期間を設けました。私はこの間に年表に記述する項目の選定や、本誌のより具体的な構成や項数などを練り上げていきました。そして、同年7月から新しい体制での本格的な編纂が始まっていくこととなるのです。



津曲研究室十周年記念誌編纂委員会のミーティングの様子

6. 年表の制作

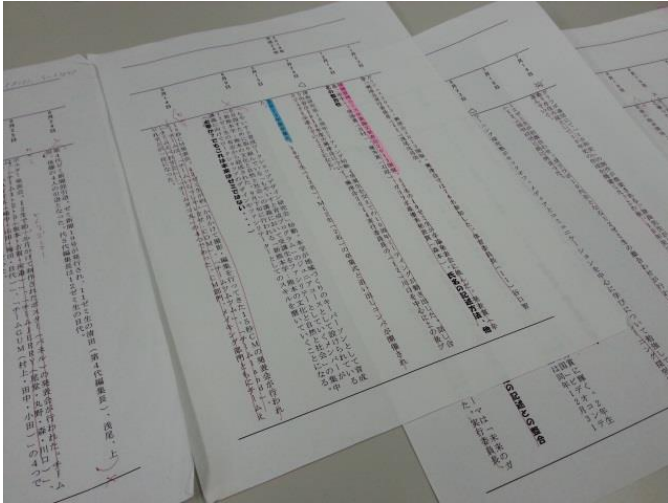
編纂が始まったからといってすぐに書き始めることが出来るわけではありません。先にも書きましたが、何よりも本誌の基礎ともいえる年表の作成が急がれました。卒業生の方々に記入して頂いた年表を基に、不足している部分や日付が不明なもの、その他映像コンテンツなどの名称などに誤りが無いのかを一つひとつ調べていきました。2か月間の準備期間

に、年表に記述するのは、各代のゼミ活動と興津会や白亜祭、ガリフェスといった各種イベント、映像コンテストなどと決めていたため、これらがいつ行われたのかを調べることから始めました。言うまでもなくイベント事はすぐに分かります。これらは写真なども多く残っていますし、何より近年始まったものが多いからです。厄介なのはゼミ活動と映像コンテストでした。

まず、ゼミ活動は、現在と 10 年前では行っていることが大きく異なります。もちろん、10 年前の 03 ゼミや 04 ゼミの活動を基に発展してきているため、全くの別物ではありません。しかし、名称が異なっていたり、実施時期が変更されていたり、活動の場が学外に代わったものなどについては津曲先生にお聞きしない限り、同じ活動であることが分からないものも多くありました。さらに、2013 年度中に 11 ゼミ生が洗い出したゼミ活動の項目は、2000 年代初頭の活動まで網羅できていないことがこのころ明らかとなっていました。

また、年表に記載する際、通常のゼミ活動や映像コンテストは、活動開始日と成果発表日、制作物の完成日のどれを記述すれば良いのかなどの選択も迫られることになりました。この課題が厄介であったのは、開始日も発表日も分かる活動もあれば、そのどちらかしか分からない活動もあったからです。結局は成果発表日や完成日に統一し、その日付を調べていくこととなりました。しかし、ここでも問題が発生します。前にも述べた通り、私たちが頼りにしていたのは写真記録やゼミ新聞、卒業文集、まとめ雑誌といったものです。私は、それらを調べれば全て日付まで分かると思っていました。が、それは甘い考えでした。ゼミ生の中に記録（写真撮影）係ができ、頻繁に写真が撮影され出したのは 2011 年ごろからです。そのため、それまでの写真は整理されて保存されていません。また、以前は時たま撮影していたといった感じであり、肝心の成果発表日の写真が無かったりすることもあったのです。さらに、撮影後に編集などが行われ、撮影日が分からなくなっている写真があったことも想定外でした。加えて、ゼミ新聞や卒業文集といったものも制作当時は記憶に新しいものを掲載しているためか、日付が記載されているものが極端に少なかったのです。

そこで必要となったのが卒業生の方々が撮影された写真を全て一つも漏らすことなく確認し、撮影日（活動の成果発表日など）が分かる写真を何としてでも探し出すことでした。どこに保存されているのか分からない写真を一つひとつ調べ上げていく作業は、その後も数か月間続いていくわけですが、これには気持ちがへこむことがしょっちゅうありました。というのも、思ったように見つからないのです。時には、当時のカレンダーとゼミの活動日を照らし合わせ、曜日を確認し、活動と活動の前後関係から日付を割り出していきました。それでも分からない場合は、卒業生の先輩方に直接お聞きし、判明した場合は記載し、分からなかった際は空白とすることになりました。先述したようにこの年表の日付を調べる作業は 2015 年の 2 月に印刷会社に本誌の原稿を入稿する直前まで続きます。



試作段階の年表。日付や記述内容の確認を行いながら赤ペンで修正していった。

7. 原稿の執筆

年表の制作が概ね出来上がったところで、その中から特に注目すべきであると思われるものを年度ごとに2つずつ選んでいきました。選定基準はその活動の重要度です。全ての活動が素晴らしいものであるため、重要度という用語がありますが、ターニングポイントになったか否かという点に注目しました。例えば、05ゼミ生が取り組んだ、第1回NHK大学対抗映像コンテストが挙げられます。これ以降、映像コンテストに参加するという文化がガリラボに根付き、今日も映像制作はガリラボの重要なゼミ活動として位置付けられています。

この選定作業が終わり、掲載する事柄が決まるとその原稿を書く作業を始めました。この作業は編纂委員の中から11ゼミ生1人、12ゼミ生3名によって行われました。文章を書くといっても300字~500字程度ですから一見簡単そうに見えます。原稿用紙1枚書けば良いのですから。しかし、一筋縄ではいかないのです。なぜならば年表しか出来上がっていない時点で分かるものはその活動が行われた日付だけだからです。ましてや年表の日付も、2000年代の初めはその半分ほどしか分かっておらず。日付が分からない活動については真っ新な状態から調べながら書かなければなりません。さらに、歴史書として作成するため、どのような活動が、どういった目的で、いつ誰によって行われたのかを客観的に記していかなければなりません。執筆した編纂委員はゼミ新聞や卒業文集、まとめ雑誌といったものを、それこそ読みあさりながら書いていきました。当時の写真や映像も確認し、どういった雰囲気の中で活動されていたのかという部分の把握も行いました。特に映像制作に関する文章を書く際は、どういった作品であるのかを理解することが重要であったため、何度も制作された映像を鑑賞し、制作の意図を読み取る努力も怠りませんでした。このことは、委員会やサークル活動についての説明に関しても同様です。短い文章ではありますが、そういった編纂委員の努力が詰まった文章は読み応えがあると思います。

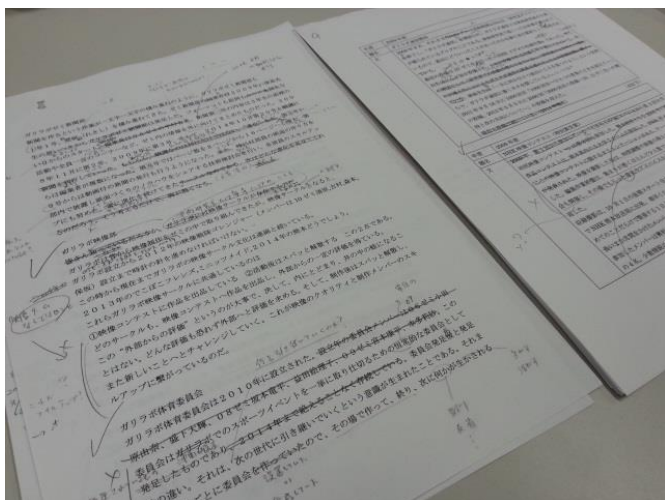
8. 原稿の校正

ほんの 300 字～500 字程度の文章ですが、的確に、そして分かりやすくまとめる作業は大変なものです。さらに、その文章は 30 個ほどになるのですから 1 人当たり 7、8 個ほど書いていることとなります。先程も述べましたが自分の感想文や日記を書くのとは違い、資料を探し、それを見ながら書くわけですから大仕事です。編纂委員のゼミでの活動は本誌の編纂だけではなく、皆大変忙しくしているので、全てを書き挙げたのは年の瀬もせまった 2014 年の 12 月 26 日でした。

もちろん、書き終われば終わりという訳ではありません。次に行うべきは校正です。複数の人物が書いた文章ですから、文体や説明の詳しさにもばらつきがあります。それを修正しなければなりません。その役目は無論のこと私でした。幸い、私が担当していた年表もその頃には 9 割ほど終わっており、日付不明の残りの部分は卒業生の先輩方に直接お聞きすることになっていたので、年明けからすぐに校正を開始することができました。

しかし、校正を始めると思ってもいなかった事態が発生しました。文章の書き方が違うことや調査の度合いに差があることは承知していましたが、その修正が役目だと思っていました。けれどももっと重大な問題が発生したのです。それは、年表と日付が違う部分があることでした。30 個もある文章の一つひとつを確認し、資料を見返しながら書き直す作業に、日付を再度確認するという作業が加わりました。この様な問題が発生した原因をはっきりをと断定することは出来ませんが、膨大な資料を参考としていたため、その過程において私たち編纂委員が見間違いをすることがあったのだと思います。そのため、再度関係する資料を全て調べ直すことにしました。

この文章の校正と日付の再確認作業が終わった文章から津曲先生にチェックをして頂きました。その時点でもさらにいくつも間違いが見つかり、修正を行いました。修正が終わった文章から順次、インデザインでの編集に移しました。ここまで来るとほぼ完成と言っても過言ではありません。出来上がりの全体像も見え始めていました。



校正と推敲を行っているときの原稿。鉛筆で修正箇所をチェックしていった。

9. 写真選び

学校の授業で歴史を学ぶ時も絵画や写真といったものは大変重要なものです。文章だけでは伝わらないものをより具体的に伝えることができます。私たち編纂委員もその重要性を感じており、研究室に残っている膨大な写真資料の一部を抜粋して掲載することにしました。

どのような写真を掲載すべきか、という議論になり、私たちは次の2点を基準に選ぶこととしました。まず、1点目は、文章としては書くことができなかつたが重要な出来事であること。2点目は、当時の研究室の雰囲気がよく伝わるものであること。歴史を振り返るものとして事務的なものばかりを載せるのではなく、ガリラボの良さとも言えるゼミ生同士の仲の良さが伝わる写真も掲載したいと思っていました。

写真は多くありますし、詳細な説明も不要なため、写真選びは比較的簡単です。しかし、一朝一夕にはいきません。まず、編纂委員が在籍していない年、つまり2005年から2011年の写真は、何が行われている時の写真なのかが分からないのです。自分で経験したことの写真であれば、その写真がどのときの写真なのかがすぐに分かりますし、思い出もよみがえってくることでしょう。でも、他人の写真ではその感覚が無いのです。例えば、ゼミ生がバレーを行っている様子だとすぐに分かる写真でも、それが情報管理コースのバレー大会か、ガリフェスなのかをすぐに断定できるとは限りません。また、保存先を変えたり、サイズの変更を行うなどの編集を経ている写真の場合は撮影日が分からなくなっているため更に難しくなりました。

苦戦しながらも写真を選び、選んだものから順に短い補足の説明を付け、インデザインでの編集に移しました。画質が悪く、ぼやけてしまっているものもありますが、卒業生の方々が懐かしく思える写真も多くあるに違いありません。そして自分が在籍していなかつた頃、または既に卒業してしまった後のゼミの活動の様子を写した写真も楽しんで見ることができると思います。

10. 誤植の確認

文章も完成し、写真も選び終え、年表も調べるだけ調べてしまい、インデザインでの編集も一通り終えたのは1月の下旬のことでした。2015年2月27日が納期であり、それに間に合う為には、2月12日までに印刷会社に原稿を入稿する必要があります。残された時間は約2週間です。この期間に70ページになる本誌の誤植を確認しなければなりません。

単なる誤植である場合はすぐに書き直せばよいので簡単です。しかし、その他の間違いも意外と多くあるものです。例えば、西暦や年号を間違っていたり、日付を間違っていたりするものです。その中でも最も厄介だったのは映像コンテストについてでした。毎年のよ

うに応募しているため、そのコンテストが何回目か分からなくなっているのです。例えば、2011年に09ゼミ生が応募したNHKの大学対抗映像コンテストは第5回目です。しかし、それを第4回目と記載している様なケースがあるのです。単なる日本語の書き間違いとは違って簡単には修正できません。書いているこちらですら既にいつのコンテストなのか、何回目の開催なのかが錯綜し始めてきていたからです。年表と文章を見比べるだけでなく、もう一度当時のゼミ新聞やまとめ雑誌、ガリラボ通信などで調べました。

何度も何度も見直し、津曲先生にも何度も確認して頂き、なんとか無事に2月12日に入稿することができました。その数日後にサンプル品が届いたので確認してみるとあれほど確認したのにまだ間違いがありました。その間違い3か所を修正したところで校了にし、印刷会社に本印刷をお願いしました。一年半にも及んだ編纂が終わったのです。

当初はガリラボ通信をまとめればよいと考えていたものが、活動する中で次第にそれだけでは完成できないことが分かり、気づけば当初の予定をはるかに上回る作業量となってしまいました。大変なことも多い中で最後まで編纂に携わってくれた編纂委員のメンバー、そしてご協力して下さった津曲先生と卒業生の皆さんには本当に感謝の言葉しかありません。

完成したとは言うものの、本誌に記すことができたのは津曲研究室の10年間の活動のほんの一部にすぎませんし、調べ損ねている、書き損ねている重要な事項も山のようにあることだと思います。完璧な、それこそ一滴も漏らすことなく網羅することができなかったことはお詫びするほかありません。しかし、時系列のもと、研究室の活動をまとめることができたことは本当に良かったと思います。

11. 最後に

ここまで、この編纂活動を振り返ってみると少々ネガティブな文面が多くなってしまいました。それだけ苦勞も多い1年半でした。しかし、本誌を編纂することは私たち編纂委員にとっても大変有意義な経験でしたし、歴史好きの私にとっては大変ながらも楽しい作業でした。私のような未熟者に、この様な貴重な機会を頂けたことに心から感謝しています。本当に有難うございました。

平成27(2015)年2月27日